環境、開発、生存基盤

――インドにおける森林管理・利用をめぐるフレーミングと森林保護運動――

京都大学　石坂晋哉

1　目的

この報告の目的は，北インド・ウッタラーカンド地方で 1973～1981 年に展開したチプコー（森林保護）運動を事例として，インドの森林管理・利用をめぐって，環境（*paryavaran*）や開発（*vikas*）などの普遍的な価値をめぐるフレーミングがいかになされていたか，そしてそれらのフレーミングがいかなる力をもったかを明らかにすることである。

ウッタラーカンド地方では 1960 年代から森林局管理下の森林地域において，企業による商業伐採が急速に進展していたが，1981 年以降，商業伐採が全面的に禁止されることになった。チプコー運動は，多くの女性を含む地元の人びとが木に抱きついて（「チプコー」とは「抱きつけ」の意）伐採を阻止したことから世界的に知られるようになったが，特にこの 1981 年の商業伐採禁止を「勝ち取った」ことにより注目を集めた。また，チプコー運動について，初期の研究ではその「環境運動」としての側面が強調されたが，1990 年代半ば以降の研究では同運動は「環境」ではなく「開発」をめざした運動だったという主張がなされるようになった。こうした先行研究の動向を踏まえ，本報告では，当時実際に運動の内外でいかなるフレーミングがなされていたかをあらためて整理したうえで，森林政策変容に対してチプコー運動が果たした役割を明確にする。

2　方法

そこで，データとしては主にインド内外で収集した 1960～2000 年代に書かれたさまざまな文字資料を用いる。具体的には，スンダルラール・バフグナー（1927-）など現地活動家たちの著作（英語・ヒンディー語）や，『森林統計』と森林局の『施業計画書』，「環境派」を自認した政治家インディラ・ガーンディーの著作集，環境森林省関係文書，さらにチプコー運動について書かれたエッセイや論文などである。これらの文字資料に加えて，2003～2013 年に断続的に実施した現地調査におけるインタビュー記録などを活用する。

3　結果

分析の結果，1970 年代半ば以降，チプコー運動において「森林の恵みとは何だろう。それは，樹脂，材木，ビジネスだ」というスローガンに替えて「森林の恵みとは何だろう。それは，大地，水，新鮮な空気だ」というスローガンが登場したと言われてきたとおり，運動において「環境」という価値にもとづくフレーミングがなされるようになっていたこと，そしてそれが，同時期のインディラ・ガーンディーなどの「環境」フレーミングと親和性をもつものだったことなどが明らかになった。ただし，運動内部においても，常にさまざまな異なるフレーミングが併存していたことに留意する必要がある。

4　結論

以上から，1970 年代半ば以降，チプコー運動における「環境」フレーミングが，企業による商業伐採を否定する方向付けに際して一定の貢献をしていたことが明らかになった。ただし，さまざまな側面をもつチプコー運動を「環境運動」（あるいは「開発を求める運動」）などと一面的に捉えるべきではない。とりわけ，インドの森林管理・利用をめぐるこれまでの歴史過程自体が「環境か開発か」を軸としたポリティクスとして展開してきたことを踏まえるならば，「環境か開発か」という単純な二項対立図式の枠内でチプコー運動を理解することは得策ではないといえる。